

越中立山女人救済儀礼再考

岩鼻通明

一 はじめに

修験道の入峰儀礼は、即身成仏を目的とした死と再生の儀礼であるとされる(注1)。もとより、明治の神仏分離以前の山岳信仰は女人禁制であつたため、この擬死再生儀礼に女性が参加することはできなかった。

山岳信仰の盛んな霊山で、峰入りに加われない女性に対する擬死再生儀礼を行つていたところはむしろ珍しかったが、その代表例が、本稿で述べる越中立山の山岳宗教集落である芦峠寺で行われていた布橋灌頂である。

この布橋灌頂については、立山信仰研究の中で、必ず言及されてきたテーマであり、近年提唱された白山信仰起源説が定説化したともみられるが(注2)、本稿ではその再検討を中心に以下の論を展開したい。

まず、最初に、この芦峠寺布橋大灌頂の概要を説明しておきたい。

二 芦峠寺布橋大灌頂

「布橋灌頂会は毎年、秋の彼岸の中日に行われた法会で、男子のみが極楽往生を遂げるといふ一般的な仏教観に対し、立山において灌頂会が女性の救済を図ることのできる唯一のものとされた。女性の登山、参詣が禁止されていた時代に全国でも極めてまれなものであり、立山には各地から幾千もの参詣者が集まつたという。

これはまず閻魔堂に入つて閻魔王、十王による審判を受け、自己の罪の軽重を知り、懺悔して袂い潔める。そして経帷子を身にまとい、目隠しをして白布を敷いた天ノ浮橋(布橋)を渡つて姥堂に入る。このときの様子は『立山御姥尊布橋大灌頂法会勧進記』に詳しく、天竺において女性が白布をもつて灌頂を執行して、如来のお告げを得たという教えを引用し、布橋灌頂の本源を説いている。

また、一山の僧徒が総出でこの行事を行う様は壮大であり、行道は百名を越える導者と数多くの参詣者が唱える法華経や雅楽の音色の中、明念坂から橋を渡る。曼荼羅の図像によると、このとき布橋から足を踏み外すと浄土へは行けず、橋を渡るとき罪業の重いものは橋が細く見え、姥堂川の谷底に落ちてしまうのであり、川の中には竜が描かれている。女性たちは手探りで、少しずつ歩を進めていったものであろう。

そして、姥堂に入り勤行ののち、唐戸がいつせいに開かれると、はるかに立山を望み、浄土への雰囲気に浸らせ、そののち血盆経、懺悔文を受けた。また灌頂会で用いた白布に経文を別山山頂硯ヶ池で刷り込み、経帷子として信者に売られたのである。信者はこれをおしただき、国許へ帰つたのであつた。人間の心理を巧みに用いた、見事な演出である。このように布橋灌頂会は立山信仰の中でも特異なものであり、姥尊信仰のみならず、浄土信仰や閻魔王信仰、さらには十王信仰の輪郭をまかいまみせてくれる。(注3)

この女人救済儀礼が成立した背景には立

山登拝をめくつての山岳宗教集落間の勢力争いがあつた(注4)。立山山麓には、芦峯寺と岩峯寺のふたつの山岳宗教集落が存在したが、近世期における立山山中の諸支配権は岩峯寺が保持しており、それに対して、芦峯寺は諸国への配札権を有するに過ぎず、開山期に訪れる男性の登山者からはあまり収益を得ることができなかった。そのため立山の遙拝地としての立地環境を活用して、布橋灌頂という女人救済儀礼を実施するに至つたと想定される。

布橋灌頂との類似が指摘された三河の花祭の白山入りの儀礼はけつして女人救済儀礼ではなく、まずそこに白山信仰起源説の第一の難点があるといえよう。また、同様に白山信仰における布橋の伝承にも女人救済儀礼としての側面は浮かび上がつて来ない。

そこで、まず芦峯寺布橋灌頂それ自体の起源の再検討から始めよう。芦峯寺の姥堂は中世の史料に既に記載がみられること(注5)、そして、布橋再建の橋札銘文(文政三(一八二〇)年)に、布橋が慶長十一(一六〇六)年に造営されたとの記載が存在す

ることから(注6)、布橋灌頂は近世初期にはすでに行われており、中世に遡る可能性もあるという見地が通説とされてきた。

ところが、古文書史料に「布橋」ないし「布橋灌頂」という呼称が登場するのは意外に後世のことであるという事実が見落とされてきたのではなからうか。

たとえば、延宝二(一六七四)年の「旧記」では「天正十八(一五九〇)年に中宮姥堂・同橋」などの修理が行われたという記載がみえ、また、「慶長十一年に中宮姥堂之橋」が掛け直されたという記載もみえる(注7)。さらに、宝暦十一(一七六一)年の「御上使御巡見先年 扣之」では「御宝前之橋」という呼称が用いられ(注8)、「布橋」という呼称は使われていない。

管見の限りでは、「布橋」の呼称は、前述の文政三(一八二〇)年の橋札銘文に「姥堂前布橋」とみえるのが初出である。「布橋灌頂」についても、天保三(一八三二)年の「布橋大灌頂縁起」(注9)、安政五(一八五八)年の「布橋灌頂法会職衆請定」(注10)など、幕末期の史料しか存在しないのである。しばしば引用される『和漢三才図会』

(序文は正徳二(一七一一)年)においても「葬礼法式」ということばが使われているのであつて、「布橋灌頂」という呼称はみられない。

ただ、布橋灌頂の由来を推測しうる一文が存在する。前述の延宝二年の「旧記」に「一同(慶長)拾九年、芳春院様・玉泉院様御両方様、中宮姥堂江為御参詣、芦峯江御着、御逗留被為成、姥堂宝前之幡・天蓋・膝付・御召衣色々被仰付、其上御宝前之橋二布橋を御掛、大分之儀式被為成、社僧・神主中返江拝領被下、被下向被為成候。」とあり、姥堂前の橋に布を掛ける儀式が行われたことをうかがうことができる。ただし、ここに記された内容が布橋灌頂を指すのかどうかは判断できない。

しかし、この記載が、文化三(一八〇六)年の「由来書帳」では「御宝前之橋二布橋御懸御渡被成候御事」とあつて(注11)、「旧記」とは表現が微妙に異なっており、この時点では既に布橋を渡るといふ灌頂儀礼が確立していたことを思わせる。

いずれにせよ、近世初期において姥堂の前に橋が掛けられていたこと自体は史実で

あるが、その時点でこの橋が「布橋」と呼ばれていたか、また、この橋の上で灌頂儀礼が行われていたかどうかは古文書史料上は確認しえないのである。

三 絵画史料にみる布橋灌頂

立山信仰を絵固化した立山曼荼羅に、この布橋灌頂がしばしば描かれていることは従来から指摘されてきた。これらの絵画史料から布橋灌頂の起源を検討することはできないだろうか。

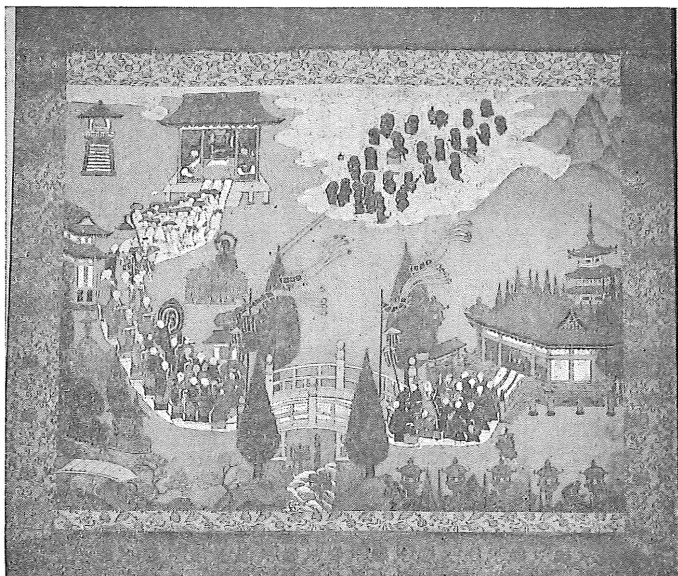


写真1 立山曼荼羅(日光坊本)にみる布橋灌頂

現存する立山曼荼羅で最古の部類に属するとみられる来迎寺本と大徳寺本には、確かに布橋灌頂の儀礼の場面が具体的に描かれている(写真1)。これらの立山曼荼羅の作成年代は十七、八世紀と推定されているが、裏書や絵師などが不明であるため、正確な作成年代を求めることは現時点では困難である(注12)。

したがって、布橋灌頂が近世初期に存在したかどうかを立山曼荼羅のみから判断することは不可能といえよう。

ところで、立山曼荼羅に描かれた布橋灌頂の場面を敦煌本十王経画卷と比較し、そのルーツと推定した川口氏の説が発表されている(注13)。氏は、両者の共通点として以下を指摘した。

- ・ 三途の川が二つの世界を隔てていること。
- ・ 川に欄干・擬宝珠のある橋がかかっていること。
- ・ 一方の岸に十王がいて審判をすること。
- ・ 亡者は目隠しをして川を渡ること。



写真2 熊野観心十界図(山形県尾花沢市延沢・龍護寺所蔵)

・ 川端に樹があり、衣がかけられ、脱衣婆と裸の亡者を描く。

・ 橋のたもとに長幡が立てられること。

ところが、あえて敦煌に布橋灌頂図のルーツを求めなくとも、日本国内に類似した場面を描く絵画が存在する。それは熊野観心十界図である(写真2)。この絵画については中世末期から近世初期に作成され、その起源は朝鮮半島にあるとする説が近年発表されており(注14)、立山曼荼羅よりも古い絵画史料であることはほぼ確実といえよう。この観心十界図と、敦煌本、立山曼荼羅を比較すると、前述の共通点のうち、橋の欄干・擬宝珠と、橋のたもとの長幡が観心十界図には描かれていないが、橋から落ちる亡者や橋の下に龍が描かれている点は敦煌本にはなく、立山曼荼羅と共通する。また、立山曼荼羅は女人のみが描かれるが、敦煌本と観心十界図では男女が描かれている。

この観心十界図が朝鮮半島に起源を有するとすれば、大陸の敦煌本十王経画卷と日本列島の立山曼荼羅をつなぐミッシング・リンクの役割を果たすといえるのではなか

ろうか。

さらに、血の池地獄と血盆経の起源をこれらの絵画史料から考察した興味深い論文が発表されている(注15)。中世後期に渡来したとされる血盆経は女人救済と深い関係にあり、立山でも布橋灌頂に参加した女性には血盆経が授けられたという。高達氏は、天台系の宗教者がこの信仰を流布したと推定している。

「立山大縁起三卷」(文化十四(一八二七)年)中の「芦嶺中宮寺姥堂大縁起」にも血の池地獄と血盆経が登場するが、この信仰が立山にもたらされて布橋灌頂という女人救済犠牲が成立したものと考えられる。

したがって、この点からも、近世初期に既に布橋灌頂が成立していたかどうかは微妙なところであり、今後さらに詳細な検討を進める余地が残されている。

四 おわりに

最後に、布橋灌頂白山信仰起源説を批判しておきたい。この五来氏の説に対する唯一の反論として白山の加賀馬場には布橋灌頂は存在しなかったとする橋氏の実証的な論文がある(注16)。

橋氏は、白山加賀馬場には布橋灌頂についての記録や、布橋という地名が中・近世の古文書や絵図史料、あるいは地元の伝承にも全く現れないこと、五来氏が布橋とみた『白山記』の一の橋で布橋灌頂の行われた可能性はないことを指摘した。

同様に、管見の限りでは、白山の越前・美濃馬場においても、古文書史料にも絵図にも布橋という地名や布橋灌頂に関する記録は全く見ることができない。

布橋灌頂が白山信仰に由来すると主張するのであれば、近世前期以前に白山で布橋灌頂が存在したことをまず証明し、そして、その儀礼が立山に伝播したことを立証しなければならぬのであるが、以上の検討で明らかかなように五来氏の説は全くその手続きを欠いている。

五来氏が例としてあげる奥三河の花祭の

「白山入り」の儀礼は、確かに布橋灌頂と共通する部分を有してはいるが、たとえば、花祭の「白山入り」が白山信仰を起源とするものであったとしても、立山の布橋灌頂が白山信仰起源であるということの証明には全くなりえない。

むしろ、三河は立山の重要な信仰圏のひとつであり、五来氏自らが指摘するように、布橋灌頂の儀礼に使われた白布が配布された旦那場であったため、逆に布橋灌頂儀礼が花祭に影響を与えたとみるほうが自然ではなからうか。

以上のように、布橋灌頂白山信仰起源説は類推に類推を重ねた結果でしかなく、全く実証性に乏しいものと言わざるをえない。ただ、五来氏も指摘しているような、橋を渡るといふ擬死再生儀礼が修験道との関連で日本各地に分布していることは事実であらう。

たとえば、エリアーデは「狭き門の通過」において、「埋葬および加入の儀礼と神話において広く見られるものは、橋と狭き門の形象である」と指摘しており、イラン神話などに、この危つき橋を渡る事例がみられ

ることを報告している（注17）。

いわば、この橋を渡るといふ擬死再生儀礼は汎ユーラシア的分布を示すといえ、杉山氏が指摘したようなユーラシアの漂泊者たちが、この信仰を流布したのであるうか（注18）。

そうであるとすれば、この信仰のルーツが敦煌であるのかも今後再検討の余地があるう。

しかし、筆者は立山の布橋灌頂は修験道の霊山において、女人救済儀礼に特化したところに最大の特徴が存在すると考えたい。それゆえ、女人救済儀礼とはいえない花祭の「白山入り」と比較するよりも、血盆経信仰や熊野比丘尼が広めた観心十界図との関連から布橋灌頂の起源を追及していくほうが生産的であらう。

以上、本稿においては、立山布橋灌頂儀礼の再検討を試み、従来の通説には多くの問題点が存在することを指摘したが、その起源を確定するまでには至らなかった。これからも、刊行されつつある『越中立山古記録』をはじめとする古文書史料および立山曼荼羅などの絵画史料の検討を通じて、

布橋灌頂の起源を探ることを今後の課題としたい。

なお、最後に、昨年秋に芦峯寺に開館した富山県立山博物館に、この布橋灌頂の模様を再現したジオラマ（写真3）が展示されていることを紹介して筆をおきたい。

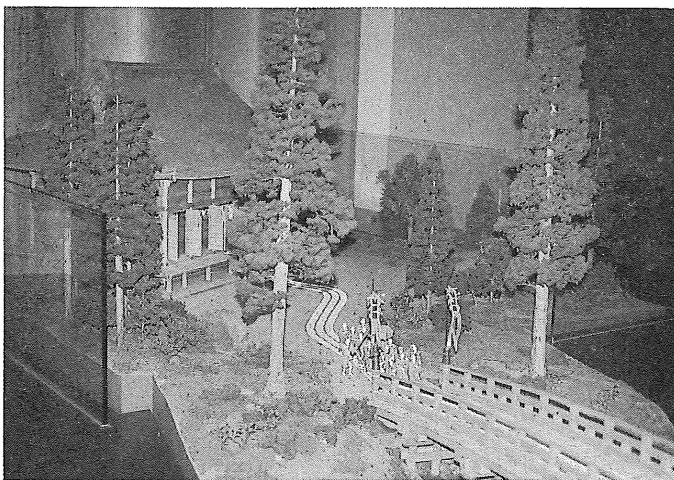


写真3 布橋灌頂ジオラマ（富山県立山博物館）

注

- (1) 戸川安章『修験道と民俗』岩崎美術社、昭47。
- (2) 五来重「布橋大灌頂と白山行事」(高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』名著出版)、昭52。立山信仰の研究史については、林雅彦「立山信仰史研究文献目録」(同氏『増補 日本の絵解き』三弥井書店)、昭59、参照。
- (3) 富山県立山博物館『常設展示総合解説』平3。
- (4) 拙稿「参詣曼荼羅にみる立山修験の空間認識」歴史地理学紀要27、古今書院、昭60。
- (5) 芦峯寺文書四、九、一二(木倉豊信編『越中立山古文書』立山開発鉄道)昭37。
- (6) 芦峯寺文書一五三(前掲『越中立山古文書』)。
- (7) 廣瀬誠編『越中立山古記録 第三卷』立山開発鉄道、平3。
- (8) 前掲『越中立山古記録 第三卷』
- (9) 佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』
- 立山神道本院、昭48。
- (10) 前掲『越中立山古記録 第三卷』
- (11) 前掲『越中立山古記録 第三卷』
- (12) 拙稿「立山マンドラ作成年代考」山岳修験2、昭61。
- (13) 川口久雄『山岳まんだらの世界』名著出版、昭62。
- (14) 西山克「熊野観心十界図」と李朝『世餓鬼図』(前編)「桃山歴史・地理25、平2。
- (15) 高達奈緒美「血の池地獄の絵相をめぐる覚書」絵解き研究6、昭63。
- (16) 橘禮吉「白山加賀禅定道の検証紀行」1 加賀禅定道に布橋灌頂はあったか「あしなか二二二、平1。
- (17) エリアーデ『聖と俗』法政大学出版局、昭44。
- (18) 杉山二郎『遊民の系譜』青土社、昭63。

(いわはなみちあき・山形大学助教授)